

1 期生が語る学問への挑戦

前 田 清 隆・高 橋 一 郎

司会 本日のシンポジウムは、『聖教新聞』紙上で掲載された、『新・人間革命』『創価大学』の章のなかに登場されている方々の話を聞いてみるという試みであります。

今日の『聖教新聞』には素晴らしいニュースが掲載されていました。皆さんもご覧になっているかと思いますが、「アメリカ創価大学第1回卒業式」に関する記事です。太平洋をはさんで東と西に創価教育を学ぶ友がいることをしみじみ痛感し、また新たに感激致しました。アメリカ創価大学の1期生が素晴らしい伝統をつくり卒業されたのだなど、感動しました。

日本の創価大学は創立35周年目を迎えましたが、やはり創価大学の伝統をつくっていただいたのは1期生の方々であります。そこで今日は1期生のお二人から、特に「学問への挑戦」という視点でお話をお聞きしたいと思います。そしてそれが今後の発展にも役立てばいいのではないかと考えております。

シンポジウムの進行についてですが、まず、神立センター長から講師の紹介があります。そしてお二人の先生からお話をさせていただきます。最後に皆さんと一緒に議論し、より内容の深いシンポジウムにしていきたいと思っております。ご協力よろしくお祈りいたします。

私の紹介が遅れましたが、創価教育研究センターの副センター長をしております、文学部教授の高橋強でございます。よろしくお祈りいたします。

それでは、神立センター長から登壇者お二人の紹介があります。では、よろしくお祈りいたします。

神立 皆さん、こんにちは。本日は創価教育研究センター主催のシンポジウムにご参加いただきありがとうございます。

創価教育研究センターは、創価大学の歴史を残し、そして様々な資料を保存することを中心に活動しております。創価大学の歴史を残すことは必然的に牧口先生、戸田先生、そして池田先生等の研究をする機関ということになります。昨年、入学式以降、創立者池田先生の「翻訳書籍1300冊展」を開催しました。この企画は、創立者が執筆された著作が様々な言語に翻訳されて各国で読まれています、その実物を展示してみようではないか、というものでした。

そこで今年はどうのような企画をしようかと考えていた折に、創立者が『新・人間革命』『創価大学』の章で、大学の開学当時をはじめ、その後の大学の歴史を執筆して下さいました。そこで、「創価大学」の章について何かできないだろうかと、皆で知恵を出し合いました。今年の5月22日まで池田記念講堂の1階で「創価大学の章を見る」という展示を開催しました。『新・人間革命』に書かれている様々な状況の写真や、当時の資料を通じて皆さんに創価大学の歴史を知っていただくという試みであります。

今回の展示では、前回 (=「翻訳書籍1300冊展」) と比べて1.5倍という多くの方々が来場されました。今後は、オープンキャンパスや夏季大学講座、夏期スクーリングでも展示を開催したいと思っています。

展示の開催にともない、『新・人間革命』に登場された各先輩方の生の声を聞きたい、創価大学の歴史を勉強したい」という声がありまして、展示と同時にシンポジウムを開催することが決まりました。私たちは『新・人間革命』を様々な形で読んでおりますが、挿絵に登場する人、ましてや本文中に登場する人たちの姿をあまり目にすることはありません。さいわい「創価大学」の章で登場された方々のなかには、創価大学に残って教鞭をとられている先輩方がいらっしゃいます。これはまさにうってつけだということで、本日はお二人の先生にお越し頂きました。

皆さんのお手元に資料が配られていると思います。「創価大学 77」の2行目に「公認会計士試験に合格した前野清行は、」とありますが、この前野清行は前田先生がモデルです。あくまでも小説ですから、1人が2人になるときもあれば、2人が1人になるときもあります。次に「創価大学 101」の下段を見てください。「一期生の経済学部からは、矢吹好成、高山一雄、船馬勝久の三人が、アメリカの大学院で博士号を取得し、後年、母校の創価大学で教鞭をとることになる」とあります。皆さんご存知の通り、矢吹好成はアメリカ創価大学の羽吹学長が、それから高山一雄は本日の講師の高橋一郎先生が、船馬勝久は創価大学副学長の馬場先生がモデルとなっています。

今日は公認会計士の試験に初めて合格した前田先生とアメリカに留学された高橋一郎先生のお二人に、『新・人間革命』で語られた当時どのような状況であったのか」というまさに草創のお話をさせて頂くことになりました。お二人の先生からは約20分ずつお話していただきまして、その後皆さんから質問をしていただければと思います。

それでは、『新・人間革命』に登場した順序でお話をさせていただこうと思います。まずはじめに前田先生、よろしくお願いします。

前田 皆さん、こんにちは。ただいまご紹介をいただきました経営学部の前田です。学籍番号は7106343と古い番号でございます(笑)。昭和50年に創価大学を卒業し、アメリカ系の公認会計士事務所で7年間勤務し、自営で会計事務所を3年経営した後、創価女子短大で6年、経営学部で14年間教員をさせていただいています。

昨年2月、創立者池田先生は、小説『新・人間革命』の「創価大学」の章で私の学生時代の拙い体験を記してくださいました。本当に恐縮で、ありがたく、心より感謝申し上げます。今でも、挿絵のとおり、昭和48年10月に大学のロビーで、司法試験に合格した小林芳夫さんと2人、先生に激励していただいたシーンを覚えています。その瞬間、入学以来2年半の苦労なんか吹っ飛ばしてしまいました。また創立者がこれほどまでに喜んで下さっていたのか、ということを知りました。

本日は、このシンポジウムの発表者に指名していただき感謝しております。学生時代の体験を中心に話させていただきます。

私は関西の兵庫県尼崎市に生まれました。父は工場の労働者で月給も安く、生活は大変でした。中学2年のときに創価学会の関西音楽隊に入り、トランペットを担当していました。昭和41年9月18日の「雨の関西文化祭」に出場したことが私の人生の原点になっています。どんなに大変なこと、苦しいことがあっても、中学時代のあの訓練を思えば、「絶

対に負けない、耐えられる」、そういう体験を積むことができました。

先生は昭和43年4月、創価高校を開校されました。わが家は貧乏であり、私立高校への仕送りなどは無理だと思いましたが、両親が「行きたければ何とかしてあげる」と応援してくれ、学園1期生として入学することができました。

しかし、優秀な人たちの中で勉強するのは大変でした。高校1年生の最初の中間試験で成績はクラス53人の中で下から2番になってしまいました。当時、各クラス上位5傑までと下位5傑までが食堂前の掲示板に張り出されたのです。大変に悲惨でした(笑)。学園の先生方も試行錯誤だったのだと思います。

実は当時のクラス担任が文学部の萩原教授でございます。また化学で23点を取ったときの先生は、工学部の山本教授でございます。なんと居づらい私の仕事場でしょうか(笑)。

私より少し先輩の時代に、池田先生は全国の高校生に対して「鳳雛よ未来へ羽ばたけ」という指針をくださいました。その中に、「未来に羽ばたく使命を自覚する時、才能の芽は、急速に伸びることができる」という一文がありました。「よーし、池田先生のご期待に応えられる人材になろう」と私は決意し、以来試験では人の2倍努力しようと、隠れて勉強をするようにしました。そのためか、私の性格は陰湿なものとなってしまいました(笑)。それはともかく、勉強した結果、2年生の時には国立文系の外部の模試で学年トップを取ったこともあります。勉強はきっかけとやる気と努力でやればできます。

しかし、私より優秀な人はたくさんいました。3年生の時にはまた成績がかなり下がりました。弱気になり、源氏物語、徒然草、方丈記、平家物語などに流れる「諸行無常」や「運命論」に傾き、国文学を勉強したい、創価大学ではなく、大阪教育大学に進学したいと真剣に考えた時期もありました。しかし、ある先輩から「池田先生のもとで学べることはすごいことなんだ。したくてもできない人が何百万人といるんだ。君には君にしかできない使命があるんだ」と激励され、ギリギリの高3の冬休みに創価大学経済学部への進学を決意した次第です。

昭和46年に創価大学が創立され、経済学部に入學しました。創価大学に入學する前に自分は創価大学に進んで何をするのか、何ができるのかと真剣に考えました。

学園の1期生から創大の1期生になった方々には、そうそうたる人たちがおられました。アメリカ創価大学学長の羽吹さん、創価大学理事長の田代さん、副学長の馬場さん、法学部長の花見さん、教務部長の山崎さん、短大学生部長の石井さん、国土交通大臣の北側さんなど、私などよりも学園時代から創立者に期待され、激励を受けた方がたくさんおられました。

今になって思えば、実はそうではなかったのです。創立者が注いでくださる愛情は皆同じだったのですが、成績が悪いと自分を卑下してしまっていたのです。

私は入学前から、マラソンで言えば2番手か3番手を走っているに過ぎないと思っていました。「創価大学の王道はこの人たちが歩むんだ。私は、横の溝を走ろう、目立たなくてもいい」と考えていました。2番手には2番手の生き方が、3番手には3番手の生き方があっていいだろうなどと思っていました。

私は、学園の卒業記念の署名に「ふるさとの 思い出尽きず 思い出を断つ」と悲壮な思いを書き、学園時代は学園時代として、大学では一からスタートするという決意をしました。

では、そんな私にいったいなにができるか。数学は苦手だが算数はできる。それを生か

せる職業は何か、それが公認会計士でした。創価大学は池田先生がつくられた大学です。他大学でも3年で合格する人がいるわけで、創価大学で合格できないわけがない。創価大学がすごい大学であることを世間に示そう、世間をアツと言わせよう。そういう気概で道を決めました。

入学時には、滝山中寮の2号室に入り、その後東寮の3号室に移りました。当時は12人部屋です。24時間にぎやかな寮で、コツコツ勉強できる環境ではありません。勉強以外のものを求めてきた方が多かったと思います。公認会計士を目指して一心不乱に勉強しているときにルームメイトから、「前田は何を考えているんだ。自分のことしか考えないエゴイストだ」と批判されたこともあります。

5月か6月のある日曜日、私は部屋に残って勉強していましたが、ルームメイトがソフトボールをしに大学のグラウンドへ行き、その帰りに創立者にお会いして激励を受けたことがありました。歓喜して帰ってきて言うには、「見てみろ。お前はこんなことをしているから先生にお会いできないじゃないか」。私は、「今に見ている。早く合格して、何回も先生にお会いできるようになってみせる」と見得をきりました。ともあれ、そんな滝山寮ではあまり勉強はできず、授業のない時間に大学の空き教室で勉強していました。

1年生の2月頃、「退寮してもいいぞ」と言われたのですぐに退寮しました(笑)。工学院大学近くの犬目町にある4畳半で、バス・トイレ共同の家賃5000円の須崎荘というアパートに引っ越しました。今もこのアパートは存在しています。築50年で(笑)。もちろん、寮時代の11人のルームメイトとは険悪な関係で終わったわけではなく、今でも親しい友人として付き合い合っています。

入学時から、公認会計士試験に合格した創価学会学生部の先輩たちが私たちの指導に当たってくださいました。当時、公認会計士試験に合格するための王道は日本商工会議所の簿記検定試験に、3級、2級、1級と順番に合格し、会計関係の科目を制覇してから、商法、経済学、経営学を勉強していくのがベストとされていました。

3級と2級は独学で、1週間に20時間ぐらひは勉強しました。1年生の6月の3級は満点、夏休みは大学浪人しているつもりで勉強し、11月の2級も満点でした。

2年生になったとき国家試験研究室がオープンし、会計士課程で学生部の先輩がゼミ形式で教えてくださいました。6月の1級検定試験は79点で合格することができました。このときもほとんど独学でしたが、この試験が公認会計士試験合格までのちょうど半分といわれていました。

大学の勉強はどうだったか。「私は公認会計士の資格で就職する。大学の成績は二の次でいい」と考えていました。結局、試験関係科目はすべて優(A)それ以外は良(B)と可(C)で結局、優良可が3分の1ずつでした。

アルバイトもしました。短期では1年生の夏休みに八王子の建設現場で土木工事を2週間、1年生の冬休みにはJR大阪駅で清掃のアルバイトも2週間したりしました。この仕事は私にはむいていないと思いました(笑)。結局、アルバイトの大半は家庭教師であり、口コミで「前田が教えた子供は成績が上がる」と広めてもらい(笑)、時期をずらして5人に教えました。

食生活はどうだったかといいますと、自炊と外食が半分ずつだったと思います。外食では、150円の野菜炒め定食をよく食べました。自炊では20円のインスタントラーメンにキャベツをちぎっていっぱい入れて食べました。家庭教師先で食事を出してもらえるのが本

当にありがたかった。この頃の体重は50キロぐらいでした。

この頃、先生が「道を開く人（開道者）」の重要性を指導された記事が『聖教新聞』に載っていました。そうだ、私は開道者なんだと決め、「誇り高く開道者の道を」と大書きして壁に貼り出し、自分を奮い立たせました。その他、次の検定試験や答案練習の目標、暗記すべき項目も貼り出しました。

この頃から勉強時間を増やし、本試験までの1年間、毎日8時間から10時間の勉強を続けるようにしました。

大学の国家試験研究室で勉強するだけでは「井の中の蛙」になってしまうと指導され、早稲田大学の公認会計士講座に入れていただきました。この講座は、早稲田のOBが主催し、学内200名、学外30名程度を選抜して、受講料は年間2000円、毎週火曜日の夜に特別講義、木曜日の夜に答案練習をしてくれました。2年生の10月から3年生の6月まで、八王子から早稲田まで通いました。12月の第1回の総合答案練習では23位、12月の第2回は14位、6月の第3回は5位という結果をとることができました。学外にまでオープンにしてくださいと寛大な早稲田大学に感謝しています。

本試験を1ヵ月後に控えた3年の6月、大学A棟7階のエレベータ前で創立者にお会いすることができました。「合格するまで先生にお会いできなくてもいい」と覚悟していましたので、大変に驚きました。ある教員が「公認会計士試験を受ける前田君です」と紹介してくださり、先生は「そうか、体を大切にがんばるんだよ」と激励してくださいました。

当時の私はネガティブだったのでしょう。「合格しなかったら先生をがっかりさせてしまう、そうになったら申し訳ない」とものすごいプレッシャーを感じました。しかし、あとはやるべきことをやるだけです。7時起床、12時就寝でリズムを整え、毎日の勝利を確実に積み重ねていきました。

7月の本試験は東京ではなく実家から通える関西会場、関西大学天満校舎で受験しました。当時の試験は3日間7科目14時間の試験でした。親もとでしたので安心して休み、マイペースで受験できました。

その結果、大学3年の秋に全国最年少で合格することができました。「創価大学」の章を読み、先生があればどの思いでいらっしやったことをはじめて知りました。

合格発表のあとは忙しい1年間でした。毎週土曜日には大学の会計士課程で授業を担当し、日曜日には創価学会学生部でゼミを担当し、早稲田大学でも担当したり、家庭教師、学生部法学委員会副委員長、学生部の班長、G長などもやりました。

卒業時には、アメリカに行きたかったので、アメリカ系の会計事務所に就職しました。東京事務所で2年、大阪事務所で2年、そしてロサンゼルス事務所で2年間仕事をしました。アメリカでは、夜間に南カリフォルニア大学の公認会計士コースで勉強し、アメリカ公認会計士試験にも合格して、ロスの国際空港で先生にご報告することもできました。

本当に、池田先生という師匠のもとで創価大学に進学し、すばらしい道を歩むことができたことに感謝しています。後輩の創大生の皆さんには、私よりすごい道を進んでいきたい。立派になっていただきたい。先生に喜んでいただけることをしようと決意すれば、道は限りなく開けます。持てる力を出し切ることができます。

池田先生は40年以上も前から、「私の最後の事業は教育である」と言われていました。創大生の皆さん、いまこの大学には夢がいっぱいあります。道がいっぱいあります。早く自分の夢を、道を決めてまっしぐらに進んでください。迷えば中途半端で終わってしまいます。

皆さんが先輩を超えられるのを楽しみに待っています。ご静聴ありがとうございました。

司会 前田先生、本当にありがとうございました。それでは続きまして、高橋一郎先生のお話です。よろしくお願いします。

高橋 ご紹介にあずかりました経済学部の高橋一郎です。当時の創価大学の様子、私たちが考えていたこと、それは全く『新・人間革命』にかかっているとおりですが、1期生としてなにか当時の空気や息吹など、皆さんの参考になることが伝えられれば幸いです。

高校生だったとき、池田先生の創価大学設立構想を『大白蓮華』で読んで、電撃に打たれたように感動しました。先生はこうおっしゃいました。

「私どもは、芸術祭、文化祭等を通して、第三文明の萌芽ともいべきものを世に示してまいりました。(中略) 真実の第三文明の興隆は、創価大学に学び、創価大学より巣立った、未来の人材によってなされることを断言しておきたいのであります」。

「なんとしても、創価大学で、池田先生のもとで、訓練を受けたい。最高の訓練を先生のもとで受けたい。創価大学に入学したい」と思ったのです。

私の両親は創価学会の会員ではなく、信仰には反対していたので、創価大学に入ること自体が大変でした。慶應高校生だった私は、創価大学の開学にあわせて卒業するため、1年間高校を休学して待機していました。というのは、高校を卒業してからでは入学を許可してもらえなかったからです。慶應高校の学生の99%が慶應大学に進学します。私の成績は良く、難関とされた医学部も太鼓判を押されていました。父はどうしても慶應に行くようにと言いました。父親になった今から考えると、安全な道を取らせたかった父の気持ちもよくわかります。その反対を押し切って、1期生として入学しました。それだけ創価大学に抱いた期待は大きかったのです。

4月2日が待望の開学式でした。しかし池田先生は来られませんでした。必ず来てくださると思い込んでいた私たちは、大きく落胆しました。式典終了後、A棟の前に集まり、一対のブロンズ像の除幕式を行いました。

4月10日になりました。入学式には絶対に池田先生がいらっしゃるに違いないと待ち望んでいました。しかし、ここにも創立者はお見えにならなかったのです。私は17歳で創価学会に入会し、しかも、反対を押し切って入学した創価大学の開学式にも入学式にも創立者をご出席いただけなかったことに、とても落胆しました。友人の表情も曇っていました。

当時の創価大学の校舎は現在のA棟の前の部分とLB教室があるラーニング棟のみであり、ラーニング棟のなかに図書館、というよりは図書室がありました。それ以外には、中央体育館がありました。小規模でしたが何もかも真新しく、学生数は700人でした。いって家族的な大学でした。大学の授業が始まりました。チャイムの音も新鮮で、教室と廊下の境が曇り硝子で、光が溢れる校舎でした。また、一見無駄と思われるA棟とS201教室の間の空間は、当時としては珍しい設計でした。最初の1年間は教員と学生の比率も理想的であり、各クラスに4人の担任がいるという贅沢さでした。私の担任の先生は、大西先生と水野先生、北先生、そして今短大の学長である福島先生でした。

1期生だけです。1年生だけです。何もかも自分たちでやらなければならない。伝統がない。しかし、逆に誰に遠慮しなくても自分たちで作れる。これほど楽しく、素晴らしい環境はなかったと思います。

寮についてお話しします。当時、滝山寮という名称はなかったかと思います。私は3号棟とよんでいた今の滝山中寮に入りました。ユニークな仲間が多く、すぐに仲良くなりました。楽しい寮生活が開始しました。各部屋は12人であり、4人ずつ寝るベッドルームが3部屋。そして6人ずつのスタディー・ルームが2部屋でした。毎日が修学旅行のようで、とても勉強できる環境ではありませんでした(笑)。

私の部屋は3号室。日当たりの悪い地下の部屋でした。とくに野口君と佐藤君のふたりが印象的でした。ちょっと変人でした。彼らは、人間は二日に一日寝ればよいというセオリーをもっていて、実践していました(笑)。丸一日は徹夜して朝まで本を読んでいました。哲学者のような野口君、飄々とした佐藤君が、いつまでもいつまでも本を読んでいた姿が今も目に浮かびます。

それから朝早く起きて6時から机に座り、素晴らしい姿勢で勉強する人もいました。彼の名前は久保芳孝君といい、金融論を勉強していました。背が高く、犬のポインターのように手足が長く、大変な努力家でした。彼は卒業後、当時エリート中のエリートである東京銀行にいきました。そうかと思うと、いつも明け方になって寝る人もいました。まさしく、寮は不夜城でした。3号棟の各部屋にも個性がありました。8号室はS U A学長の羽吹さんがいた部屋だと思うのですが、よく勉強する部屋でした。勉強する時間帯を設定して、その間は静粛にして勉強するという部屋です。

自治会員として頑張る人も多くいました。学生の組織を作ることが大学建設と考えて、謄写版でビラをつくったり、一生懸命呼び込みをしたりしていました。私と同室の黒田君も自治会のメンバーでした。議論や印刷物の作成などで、連日、夜遅くというか、朝早く部屋に帰ってきました。私たちは夜を徹してよく議論しました。話し合うことが楽しくて仕方がありませんでした。

寮でよく話題に上ったことは、「創立者はどうして大学に来てくださらないのだろう。私たちは、きっと何か足りないに違いない」「一体、何が間違っているのだろう。私たちのどこかに狂いがあるのだろうか」「求道心がないのか」「先生が来てくださるような大学にするにはどうしたらよいのだろうか」「私たちの使命は何なのか。それは、世界平和の人材になることだろうか」「自己完成とは何だろうか」等、議論はどうどうめぐりだったようですが、毎日のように語り合いました。

結論はいつも、それぞれの立場で創価大学の建設をしようということでした。多くの友がそれぞれ自分なりの生き方、解答を探し、活動を開始していました。自分たちが何も無いこのキャンパスに理想の大学を建設するのだという意気に燃えていました。クラブやサークルが山のようにできていきました。英語研究会、スキー部、フランス語研究会、考古学研究会、日本伝統文化研究会、新聞部、プリンスマーシー、創音連。また『新・人間革命』にとりあげられた中国研究会、野球部、アメフト。もちろんクラブには先輩はいませんでした。人材も足りなく、コーチもない。練習場もない。プールもない。予算もない。ないないづくしでした。部員の争奪戦が激しく、義理立てして、一人が二つ三つのサークルやクラブ、研究会に所属していました。みな忙しかった。しかし、このうえなく楽しく充実していました。フランス語研究会もかなり勉強していました。丹野先生という素晴らしい指導者を得て、短期間にフランス語を上達させていました。サッカー部は、創価高校と練習試合をしては負けていました(笑)。しかし、一生懸命練習していました。

池田先生のもとで訓練を受けるために新しい大学に来た。一流大学に合格しながら来て

いる学生も多かったです。ちなみにある調査では、どこの学部だったかははっきり覚えておりませんが、偏差値は、早稲田大学の教育学部より上にランクされていました。手前味噌で恐縮ですが、1 期の友人たちは優秀だなど思いました。

開学間もないころの授業の雰囲気を伝えます。フランス語の担当は、法政大学の助教授をされていた田中貞夫先生。楽しく魅力的な授業をしてくださいました。フランス語の授業はクラスごと50人くらいでした。田中先生が「読める人？」というやいなや、数人の学生が勢いよく手を上げます。千葉から電車通学で片道3時間以上もかかる女子学生も、疲れきった体に鞭打って電車の中で予習し、一生懸命手を挙げていました。田中先生は「この大学なら」と思い、創価大学に籍を移されました。

私は「社会科学研究会」を立ち上げました。私の一貫した人生のテーマは、いまだにできていませんが、「創立者を、創価大学を宣揚する研究者になりたい」ということです。創価大学を一流の大学にしたい。世間の評価基準でも一流にしたいということです。学問の水準で認められる大学になってはじめて本当の実力の証明になると思うのです。尊敬する北先生がよくおっしゃっていました。「うちは団体戦では強い。しかしこれからは、個人戦で勝たなくてはならない」と。私たちは理想を描いて来た分、正直失望もありました。例えば、ある卒業生の文集には、「あえて極言すれば、なんら魅力の新鮮さのない講義、単位取得のためだけとしか思えない授業。年寄りばかりの教授たち、旧態依然とした学内体制、まるで役所のような事務窓口。私を含めて意識の低い学友たち」とあります。私も同じ感想でした。立派な実力、人格ともに兼ね備えた教員はまだまだ少なかった。学生は力があるのに、それを伸ばしてくれる力ある教員がまだまだいないと、生意気にも思っていました。

経済学部の北先生は、当時26歳。学生のなかに何の隔てもなく入ってくださる教員は、今とは異なり少数でした。北先生に顧問になっていただき、社会科学研究会を発足させ、「アダム・スミス」、「社会科学の方法」などについて勉強しました。私たちは「北さん」と気楽に呼ばせていただき、先生の教員寮で、あるいは私たちの学生寮で、岩波新書を教材に勉強会を開いていただきました。パンをたくさん抱えて寮の部屋に入ってこられた北先生の姿が、いまだにまぶたに焼きついています。

創立者の言葉も伝わってきました。「1 期生が教壇に立って、本当の人間教育が始まる」と。北先生というロール・モデルもあり、「私も、いつか愛する創価大学の教授になろう」と決意していました。大学1、2年生の時代は、英語とフランス語の習得に力を注ぎました。実家は倒産し、借金だらけでどうなるかはわからないものの、将来は留学して実力をつけなければ教員にはなれないと考えていました。暇があれば、神田の古本屋街に行っては、国際経済学や理論経済学の本を買集めていました。非常勤の先生方や、期待して他大学を辞められて創価大学にきた教授たちを落胆させたくないとの思いから、どんな授業でも、毎回質問しました。怠けている学生も大勢いました。しかし、私は池田先生の望まれる創大生を目指そうと思うようにしました。

池田先生がどういうお気持ちであったか、当時の私たちには知るよしもありませんでした。そんななか、『新・人間革命』にあるように、5月に女子球技大会がありました。そのときが、創立者が来学された最初の機会でした。学園出身の少数の学生を中心に、万葉の家で創立者との会食がありました。しかし、大多数の学生が創立者にお会いする機会はありませんでした。そこで私たちは、今の裏門のあたりに整列して先生の車が通るのを

迎えし、お見送りしました。「これだけの学生がいるなら創価大学は大丈夫だね」といわれていたそうです。

8月に創価学会学生部の夏季講習会がありました。燃えに燃えた夏季講習会でした。ここでの一人の創大生のお願いが、「第一回創大祭」につながったという経緯は、『新・人間革命』に描写されているとおりです。私たちは燃えました。とうとう先生が来てくださる。最高の大学祭にして、創立者をお迎えしようと一致団結しました。実行委員会が結成され、「ロマンと英知と表現と」という統一テーマに決まりました。

私は、社会科学研究会9名の部長として、恥ずかしくない展示と論文集をつくらうと思いました。池田先生が講演で、『宇宙船地球号』を提唱したケネス・E・ボールディング博士を引用されていたので、ボールディング博士について調べました。学内の輪転機はふさがっていたため、夜中に、隣の部屋の寮生のお父様の学校で印刷し、朝帰ってくるということもしました。日々の睡眠時間も、0時間、3時間、0時間、3時間といった具合で、ほとんど寝られない生活がつづきました。皆が「池田先生の期待にこたえたい。世間に創価大学の素晴らしさをわかってもらいたい」との一心で頑張りました。

出来上がったのは当日の朝9時でした。後日談ですが、出来上がった論文集を何人かの知識人にも送りました。行動する進歩的文化人として、60年安保闘争のリーダーとして著名な清水幾太郎、ボールディングの近代経済学の訳者・宇野健吾都立大学教授（当時）などです。大変によるこんで丁寧なご返事をいただきました。それが縁なのかどうかわかりませんが、後日、宇野先生が創価大学の非常勤講師として、教壇に立たれるようになりました。

徹夜の連続で疲労困憊していましたが、緊張しながら池田先生を教室でお待ちしていました。先生は展示を見てくださり、「ああ、ボールディングだね」といわれ、私たちのつたない論文集というか作文集を「永久保存するよ」といって、買っていただきました。残りの10部だけは売り切れないようにと隠していたのですが、何部あるとも言わないのに、「10部買うよ」と知っていたかのようにいわれたのにはビックリしました。また、「ここは何人？」と聞かれ、食券を9人分くださいました。最後に、出がけに振り返られて、「皆のことはよく知っているよ」といっていただきました。

有志の舞や剣舞のあとで、劇的な、全体集会でのスピーチがありました。「日本一小さい大学かもしれない。しかし、皆さんが、この大学祭を何とか成功させようと、食べるものも食べないで、夜も寝ないで頑張ったことはよくわかっております」と温かく包み込んでくださいました。また、「苦勞して第一回の大学祭を運営した諸君たちの努力は、二十年先、三十年先に、必ずや偉大な栄光の花として咲き薫ると、私は信じております。今後、諸君の後には、何万、何十万という後輩が、陸続と創価大学の門をくぐることでしょう。その後輩たちのためにも、先駆を切って、道なき道を開き、建学の精神に貫かれた人間教育の軌道をつくらっていただきたいのであります」「陰の陰の、陰で人類の中でただ一人、君たちを応援してまいります」とおっしゃってくださいました。皆感動に目をうるませていました。「ここに原点はできた。先生のスピーチをこうして聞いた。自分の人生の原点はできた」と思いました。創立者の大きな期待を感じ、慈愛を知ることができました。徹夜、徹夜の連続で奮闘した日々は、今、つくづく最高の黄金の青春の日記帳だったと思えます。

卒業式が近づいてきました。こんな充実した大学生活にも別れがやってきます。なつか

しい友ともお別れです。私は大学院に残ることにしました。去りがたい、あまりにも思い出深きこの母校。別れのときはやってきました。

3月22日、八王子の空は晴れ渡っていました。池田先生が卒業式に参加してくださいました。「卒業して離れ離れになることは、散っていく姿と言えます。しかし、諸君は、生涯、『創価大学の一会儼然として未だ散らず』との心で生き抜くことを、この席において盟約してはどうかと、ご提案申し上げたいと思いますが、いかがでありますでしょうか！」と。私たちの心のひだの、ひだまでわかってくださって、これ以上ない励ましと生涯の宝の指針をくださいました。

「自分たちは、どこに行こうが、創立者のもとに集った栄光の創大1期生だ！生涯にわたる、固く強い友情に結ばれた永遠の友だ！」と、『新・人間革命』に書かれている通りです。

何ももっていない、ただ若いだけの私たちに、どこまでも限りなく期待し、信頼し、いつも心を砕いてくださる池田先生。まるでわが子に対するように無償の行動をしてくださる池田先生。すばらしき使命の生涯の友。草創の時代の創価大学で青春時代を過ごしたのは、何物にもかえがたい幸せなことでした。また、卒業後わかったことですが、もし、開学当初から創立者が、激励にきて下さっていたら、きっと甘えてしまって、向上心を失っていたのではないだろうかと思います。最高の訓練をして下さったと感じます。

その後、大学院に進み、アメリカに留学し、夢叶い母校の教壇に立って、学生の皆さんとともに充実した毎日を送っています。アメリカで博士号を取得したとき、池田先生から「栄冠の博士号、誠におめでとう。私は本当にうれしい。勉学の成功と益々の大成を祈ります」とすぐに電報をいただきました。

最後に、「創価大学」の章の池田先生のお言葉で締めくくらせていただきます。

「時の流れは早い。特に青春時代という黄金の時は、瞬く間に過ぎ去る。ゆえに悔いなき敢闘の日々でなければならない」

「創価大学を一流の大学に」というわが使命に自分の立場で、どこまでも挑戦していきたいと思っています。ご清聴、ありがとうございました（大拍手）。

司会 素晴らしいお話、ありがとうございました。草創の建設の息吹きが響いてくるような、また創立者と歩まれた歴史をうかがい、私も大変感動しております。

では、皆さんのほうから何か聞きたいことがありましたら、遠慮せず挙手していただければと思います。

学生 今日は大変貴重なお話をありがとうございました。私は今、教員採用試験の受験勉強をしております。やはり、行き詰まることも多々あります。そこで、お二人の先生方から何かアドバイスをいただければと思います。

前田 それでは私のほうから述べたいと思います。先ほどもお話しましたが、努力した分だけ必ず報われることは間違いないと思います。もしかすると、すぐに結果が出ないときもあるかもしれませんが、それでも「次の年は必ず！」という気持ちが大事だと思います。

もう一つは、「創価大学は奇跡を起こす大学だ」と言った人がいます。だから、自分の使命を定めて、「私のような人が教員に選ばれなくて、どうなるんだ！」というぐらいの気

持ちで、自信をもって目指してください。以上です。

高橋 私の場合、家に多額の借金がありました。そういったなかで、一つは「使命」だと思います。未来の姿を思い浮かべて不可能を可能にすること。それからもう一つはやはり「努力」です。冬は必ず春となります。

実際には、大きい仕事を細かく分けること、かつ易しいことから始めることが大事なのかなと思います。「今日は〇〇をしよう」と決めることでしょうか。「やる気」は行動する前に起こるものではなくて、行動していくなかで起こるものです。

学生 貴重な講演、ありがとうございました。僕は大学院英文学専攻に所属しています。先生方に2つ質問があります。まず1つは、「なぜ自身の勉強や創大祭でそのような努力ができたのか」ということについてもう少し詳しくお聞かせください。それともう1つは、創価大学は開学して35周年を迎えたわけですが、「今、創立者が創大生に望むことは何か」ということについて先生方のご意見をお聞かせください。

高橋 創価学会学生部の一員として活動を1年間くらい一生懸命しているときに、「自分は創価大学の教員になりたいのだな」ということを確認できました。それは大学が好きだったからという理由もあります。1期生は少人数であり、皆が兄弟のような感覚ですぐに仲良くなりました。また、創立者から数多くの激励をいただいたということで、私自身の使命が触発されたように感じます。前田先生も話されていましたが、「使命を自覚するとき、才能の芽は、急速に伸びる」だと思います。使命というものは誰かが教えてくれるものではなく、自分で感じ取る以外にありません。

それともう1つの質問に対してですが、やはり創立者が「勉学」と何度もおっしゃっています。私が以前お聞きした話ですが、「創大生は勉強していないということを知ると、胸をえぐられるぐらい悲しい」と。道なき道を自分が切り開いていくという点では、皆さんも1期生と同じだと思います。そういう思いで、自分に与えられた分野で後輩のために道を切り開いていくことだと思います。

前田 では、私のほうから申し上げます。1つ目の質問につきましては、創価大学を一流に、また世間をあっと言わせようという気概を1期生は持っていたのではないかと思います。例えば私の例を述べますと、私が創大生であることを叔母に言うと「そんなわけの分からない大学に行っても就職先はない」と言われ、私は「それだったら自分で会社をつくれればいいじゃないか。大丈夫ですから」と答えました。当時は世間で評価されていなかったのです。

このようなエネルギーが1期生に植えられていったのではないかと思います。そこで私は勉強に力を注いだわけですが、やはり目標に向かって徹底して行動することです。中途半端に考えていたならば、これだけの努力はできなかったと思います。

それから2つ目の質問ですが、創立者は堅苦しいことは望んでおられないと思います。皆さんののびのびと勉強することを望んでおられるのではないのでしょうか。しっかり勉強することは言うまでもないと思います。最近、教員として感じていることは、本当の教育はその学校を卒業した後には何が残っているかではないのでしょうか。そういう意味では、授

1期生が語る学問への挑戦

業で学生に教えるというよりも勉強しようとするきっかけを与えることだと思います。それができれば、勉強も楽しくなるでしょう。

とにかく、創立者は創大生一人一人が自分の立場で努力されることを望んでいると思います。

司会 それでは時間となりました。本日、登壇された先生方に拍手をお願いします（大拍手）。忙しいなか、本日のシンポジウムに来てくださりありがとうございました。このような企画を次回も開催していく予定ですので、またよろしくお願ひ致します。それでは本日のシンポジウムを閉会します（大拍手）。